



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ語樺太方言における名詞複数接尾辞 : ahcinの用法
Author(s)	阪口, 諒
Citation	北方人文研究, 13, 1-19
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77239
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_02_Sakaguchi.pdf



アイヌ語樺太方言における名詞複数接尾辞-ahcin の用法

阪口 諒

(千葉大学大学院人文公共学府博士後期課程)

要旨

アイヌ語樺太方言の名詞複数接尾辞には-ahcin と-utara の二つが認められる。-ahcin は名詞の所属形（人称形）のみに付加されるのに対し、-utara は名詞の概念形（人称接辞、所属接尾辞が付かない形）にも付加されるという点が異なっているが、両者の意味の差異について詳細に検討したものはない。本稿では-ahcin の用例を分析した後、-utara と対照することで両者の意味について考察を加えた。調査の結果、普通名詞の所属形に付加された-ahcin は同質複数（additive plural）を表すことが明らかになった。また、名詞の所属形と同じ形態である名詞化辞に-ahcin が付加された例もあることが分かったが、これも同じく同質複数と解釈できることを示した。次に同じく名詞複数接尾辞である-utara を調査し、-utara が同質複数と近似複数（associative plural）の両方を表すことを確認した。-ahcin と異なり、-utara は固有名詞にも付加されるが、その際には近似複数の意味でのみ用いられる。さらに、-utara には複数の個人名の後に接続する例があるが、これは「例示的近似複数」（山越 2003：141）である可能性を指摘した。

1. はじめに

本稿では、アイヌ語樺太方言¹⁾（以下、樺太方言）の名詞に用いられる複数接尾辞-ahcin²⁾を扱う。樺太方言は、樺太に居住していた樺太アイヌの言語であり、北海道方言、千島方言と共にアイヌ語の三大方言をなすと考えられている。樺太方言には北海道方言に見られない名詞の数の範疇がある。樺太方言の名詞数に関して、服部（1961：7）は、「単数」と「複数」の区別があり、名詞が特定の「所有者」と結び付けられる所属形（人称形）³⁾となる際には、厳密に「単数」と「複数」が区

1) 本稿では日本・ロシア領になる以前から樺太（現サハリン）に居住し、1945年頃までこの地域で暮らしていた人々とその子孫に対する呼称として樺太アイヌを用い、その言語をアイヌ語樺太方言とする。もともとカタカナで筆記されている例文は、一段目に原文表記を、二段目には上記の原文を筆者の解釈で書き改めたものを掲載している。なお、母音の長短は原文で区別されている場合のみ書き分ける。また、必要がないかぎり、声門閉鎖音/’/を省略した。例文の日本語訳は筆者によるものである。

2) 文献により-hcin~hsin、-cin~sin など、語形が若干異なるが、それらは自由変異であり、特に語形を問題としない場合、この形態素を-ahcin で代表する。その理由としては、子音に後続する場合、hcin の前に現れる母音は常に a であり、他の母音が現れることがなく（*-uhcin、*-ehcin）、-ahcin という形態素が母音に後続すると a が脱落して-hcin になると解釈できるためである。また、動詞に後置される接尾辞-ahci も複数を表し、両者は同じ形態素だとされることもあるが（知里 1973 [1942]：497；丹菊 2012：119）、前節要素が異なるだけでなく、語形にも差異があるため同じ形態素としては扱わない。

3) 名詞の基本的な語形は「概念形」と呼ばれ、概念形を語幹として所属接尾辞を付加したものが「所属形」

別されるとする。また、人称形そのものは「単数」（「2.3.2. 統語的・意味的な特徴」で後述する）を表し、複数の指示対象の名詞には、人称形に複数接尾辞-ahcin が接続すると指摘する。しかし、人称形を含めた樺太方言の名詞に関して、複数性を明示する際に最も多く用いられるのは-utara⁴⁾という接尾辞である。-ahcin と-utara の二つ⁵⁾の複数接尾辞の使い分けに関して、Piłsudski (1912: 36) や村崎 (1979: 85; 2013: 70-71) で若干指摘されているが、それに当てはまらない例も存在する。

本稿の目的はアイヌ語樺太方言における名詞複数接尾辞-ahcin の統語的・意味的な特徴を用例から分析し、同じく名詞複数接尾辞である-utara との対照から明らかにすることである。本稿ではアイヌ語樺太方言の複数接尾辞-ahcin が普通名詞の人称形（所属形）、名詞化辞に付加され、同質複数⁶⁾のみを意味することを指摘し、そして、-utara はあらゆる普通名詞（概念形、人称形の双方）に後接し、同質複数だけでなく近似複数⁷⁾としても用いられる、という統語的・意味的差異を指摘する。

2. 先行研究

2.1. 樺太方言における名詞の数範疇

樺太方言の名詞の数範疇に関して初めて指摘したのは服部 (1961) である。それまでに樺太方言を扱った Piłsudski (1912: 36) と知里 (1973 [1942]: 518-519) において、複数のあらわす接尾辞として-ahcin、-utara が扱われているが⁸⁾、以下の例のように、名詞⁹⁾においては「数」範疇はなく単複両様に用いることができる（金田一 1913: 11; 知里 1973 [1942]: 517-8; 知里 1973 [1944]: 366) と記述され、「単数」と「複数」の区別は指摘されていない。

①sine aynu ひとりの人

②wan aynu 10 人の人 (どちらも金田一 1913: 11 より)

服部 (1961: 7) は樺太方言の人称接辞の調査を行う中で、人称形の名詞の表わす対象が複数であることを意味する場合に-ahcin が接尾することを指摘し、-ahcin が接尾しない人称形は、共有する一つのもので、それぞれが一つずつ持つものでも、とにかく「単数」を表すと指摘している。また、知里 (1973 [1942]: 530-531) は概念形の意味を以下のように指摘しているが、以下の例から

である。さらに所属形に人称接辞が付加されたものが「人称形」である。三人称では所属形と人称形の形態が一致する（ゼロの人称接辞が付加され则认为）。

4) /utara/は「仲間、親戚」という意味を表す自立形式の utara (所属形 utari) や、単独で用いられる utara (佐藤 1987 参照) があるが、本稿では名詞に付加されて複数であることを明示する複数接尾辞-utara (日本語の「-たち」と似た用法) に限定して-ahcin と対照とする。

5) 後述するように、村崎 (1979) はより多くの複数標識を挙げているが、統語的、意味的な観点から oy、ikiri は普通名詞、okore は副詞と考えられるため、本稿では扱わない。

6) 同質複数 (Jespersen 1924 では normal plural 「正常複数」) は「A の複数」が Aa + Ab + Ac…の意味を表すもの。Daniel & Moravcsik (2005: 150) で 'Additive plurals' と呼ばれているものである。山越 (2003) や鄭 (2005) に従い、同質複数という用語を採用した。

7) 近似複数 (Jespersen 1924 では plural of approximation) は、「A の複数」が「A とそれに類似したもの」の意味を表す複数である。Daniel & Moravcsik (2005: 150) では 'associative plural' と呼ばれている。

8) 金田一 (1913: 54) で-ahcin は「shin, [助] 語勢ヲツヨメル辞」として扱われている。

9) 知里 (1973 [1944]: 366) では人称形に関しても単複の区別がないことになっている。

は概念形に数の区別がないことがうかがえる。

概念形は概念のみの表示に用いられる。pirika **maxnekux** max ne koroči 〈美しい女（ども）を妻として彼等持った〉（ピル¹⁰⁾、p. 69）。pon-max hene koroxsi 〈妾なども彼等持った〉（「物語」¹¹⁾ p. 5）。max an-koro 〈妻を我持った〉。これらの「マハ」「ボン・マハ」はそれぞれ「妻といふもの」「妾といふもの」の如き一般的な意味に考へられてゐるのである。これを人称形にして「マチ アンコロ」などと云はうものなら「彼の妻を我持った」の意味になり大変なことになってしまう。

（知里 1973 [1942] : 530-531、太字・下線は筆者）

以上の例の太字部分の maxnekux（筆者の表記で mahnekuh）は実際には複数の対象を示しているが、概念形であるために数の表示はなされていない（例 21 も参照）。しかし、名詞が人称形になると数の区別が生じ、複数の場合には複数標識-ahcin を付加しなくてはならない（服部 1961 : 7）。以下の例(3)に続く文が例(4)であるが、(3)では所属形+ahcin、(4)では概念形が用いられている。指示している対象は同じだが、所属形で表されるか否かによって数の表示が異なっている。

- (3) tám múre horókéu támbe neámpe
この 夫婦 狼 これ TOP
e-ko-jup-útar-hi Túrup-un nišpa-utara sirimak-i-śín tahne.
2SG.S-持つ-兄-PL-POSS ルルバ-の 長者-PL 憑神-POSS-PL である
「この夫婦の狼は、これはお前の兄たち、ルルバの長者たちの憑神なのだ」

（Nr. 23 : 85-86¹²⁾）

- (4) e-ko—jup-útar-hi śirimax orovano an-kamèsu-xśí
2SG.S-持つ-兄-PL-POSS 憑神 から IND-救う-PL
「お前の兄たちは憑神（＝夫婦の狼）によって守られている」

（Nr. 23 : 87-88）

そのほか、Piłsudski (1912) 第 27 話（Nr. 27）は 3 人兄弟の話であるが、所属形を用いた「兄」を指す言い方に着目すると（以下、表記は変更してある。例の後の数字は Nr. 27 の行数）、弟から見て兄のうちの一人を呼ぶときは an-hoskiram-hu 「1SG.P-兄-POSS」(20, 24, 31)、i-hoskiram-hu¹³⁾ 「1SG.P-兄-POSS」(22)、an-poniwne-hoskiram-hu 「1SG.P-年 下 の-兄-POSS」(19)、i-kiyane-kuru 「1SG.P-年上の-者」(27) という言い方であるが、二人の兄を指すときには i-hoskiram-hu-sin 「1SG.P-兄-POSS-PL」(40, 44) an-(h)oskiram-hu-sin 「1SG.P-兄-POSS-PL」(46) an-kiyane-k(uh)-utara¹⁴⁾ 「1SG.P-年上の-者-PL」(17) であり、人称形（所属形）で表されたもの

10) Piłsudski (1912) のこと。

11) 山邊 [著]・金田一 [編] (1913) のこと。

12) 以降、Piłsudski (1912) に収録されている物語の番号と行数を、Nr. 話数 : 行数のように示す。

13) 親族名称を表す際に目的格人称接辞をとることがある。本稿ではこれも所有格（略号 P）と認定する。

14) これには所属接尾辞が付加されていないが、人称接辞が付加されているため、ひとまず人称形（所属形）としておく。こうした例は樺太方言に散見され（知里 1973 [1942] : 533）、山邊 [著]・金田一 [編] (1913 : 1、52、53) では an-cinkew 「1SG.P-先祖」というような例が見られる。

には必ず複数接尾辞が用いられることが確認できる。しかし、必ずしも-ahcinに限定されているわけではなく-utaraも用いられる(知里1973[1942]:518)。また、所属形でもay(<an)-yup-utar(i)-hi「1SG.P-兄-PL-POSS」(Nr. 21:63)やan-tu-yup-ih「1SG.P-二人の-兄-POSS」(Nr. 23:198など)のように-utara(所属形 utari)「～たち」やtu-「二人の」といった複数であることを示す形態素が含まれている場合には-ahcinは付加されていない。

2.2. その他の複数接尾辞との関係について

樺太方言の名詞に付加される複数接尾辞に関して、Piłsudski(1912:36)が初めて-ahcinの存在を指摘し、同じく複数接尾辞である-utaraとの差異を指摘した。それによれば-ahcinは普通、無生物に用いられるのに対し、-utaraは生物に付加されるという。その後、バチラー(1938)¹⁵⁾や知里(1943)がPiłsudskiの分析を踏まえ-ahcinの記述を行っている。特に知里(1943)はPiłsudski(1912)の記述を紹介した上で、-ahcinの接続規則を明らかにしている。知里(1973[1942])は後の服部(1961)と異なり、-ahcinを選択的に用いられるものだとしている¹⁶⁾。その後、服部(1961:7)や村崎(1979:85, 92)が複数接尾辞について報告している。服部(1961:7)は樺太方言の人称接辞を分析する中で-ahcinに考察を加え、組織的にその機能を明らかにしている(「2.3.2. 統語的・意味的な特徴」参照)が、人称接辞と関わる範囲で複数接尾辞-ahcinを分析したものであり、他の複数接尾辞に関する指摘は行われていない。村崎(1979:85, 92; 2013:70-71)は、服部(1961)の分析に加え、-ahcinと-utaraとの統語的な差異を指摘しているが、その指摘は再検討をする必要がある。村崎(1979:85, 92)は意味の差異に関しては指摘していないが、-ahcinは所属形に、-utaraは「所属形ではない」名詞に付くとする。

筆者は、Piłsudski(1912)や知里(1943)同様、樺太方言の複数接尾辞として-ahcinと-utaraの二つを認める。/utara/には、総称的、前方照応的に用いられる単独のutara(佐藤1987参照)、普通名詞utara「親戚、仲間」(所属形 utari(hi))があるが、名詞に付加されて複数であることを明示する/utara/は自立形式ではないため、-ahcinと同じく接尾辞に分類する¹⁷⁾。

以上の先行研究では-ahcin、-utaraが「複数」を表すという点で共通しているものの、二つの複数標識-ahcinと-utaraの使い分けについては明確に指摘されているとは言えない。そこで本稿では、先行研究を踏まえうえて、改めて樺太方言のテキストから複数接尾辞-ahcinの用いられ方を検討し、そのうえで二つの複数接尾辞の使い分けを明らかにする。

2.3. 複数接尾辞-ahcin

2.3.1. 形態について

-ahcinは子音に後続する場合の形態である¹⁸⁾。-ahcinは所属接尾辞hV(Vは母音)が付加され

15) バチラー(1938:36-37, 81, 418)においても-ahcinが扱われているが、用例を含めPiłsudski(1912)を基にしていることが分かる。また実在するか怪しい語形も含まれる。

16) 同書には「樺太方言に於ける名詞の人称変化表」(知里1973[1942]:530)が掲載されているが、その表では-sinが〔 〕で囲まれており、選択的なものとして捉えていたことが伺える。後の知里(1973[1944]:366)でも、an-hoko「1SG.P-夫(-POSS)」という例に関して、単複の区別がないことを主張している。

17) 村崎(1979)ではutaraが「連体後詞」に分類されている。

18) これは知里(1973[1942]:497)が明らかにしている。

た所属形の名詞（詳しくは次節）に接続するので、ほとんどの場合、-hcin という形態で実現する。-hcin の h は弱化し、音声としてほとんど聞こえない場合もあるため、-cin と記録されていることも多い。また、地域的な差異として、-(a)hsin、-sin という異形態がみられる。Piłsudski (1912) から、-ahsin は南部でより多く用いられる形式であることが伺える。

2.3.2. 統語的・意味的な特徴

樺太方言の名詞構造は服部 (1961: 6-7) を基にすると、次のように図示できる。これは本稿の資料においてもおおそ当てはまることが確認できる。ただし、本稿の資料では ikoro-sin 「宝物（複数）」(Nr. 23: 34) tehpoosin 「鉄砲（複数）」(山邊 [著]・金田一 [編] 1913: 127) のように所属接尾辞の有無が明確に判断できないものもある¹⁹⁾。

seta	犬	「犬」（単数も複数も区別なし）
seta-ha	犬-POSS	「彼の犬」
seta-ha-hcin	犬-POSS-PL	「彼の犬ども」
ku-seta-ha	1SG.P-犬-POSS	「私の犬（一匹）」
ku-seta-ha-hcin	1SG.P-犬-POSS-PL	「私の犬ども」
an-seta-ha-hcin	1PL.P-犬-POSS-PL	「私たちの犬ども」
an-seta-ha	1PL.P-犬-POSS	「私たちの犬」

(服部 1961: 6-7)

人称接辞 = 概念形-所属接尾辞²⁰⁾-複数接尾辞

人称形（下線部を所属形と呼ぶ。）

所属形（人称形）で表される「単数」の意味に関しては、注意が必要な点がある。an-seta-ha は「我々が共有する 1 匹の犬」でも、「我々ひとりひとりが 1 匹ずつ持っているその各々の犬（単）」でも良い。とにかく「単数の犬」（服部 1961: 7）を表わすという。つまり、所属形そのものは「単数」だけでなく「配分単数」²¹⁾をも意味する。

- (5) anokayahcin an-tek-ihi ohta ama yan.
PRON 1PL-手-POSS に 置く 丁寧な命令

「私たち（ひとりひとり）の手（単数）に入れておくれ」（服部 1961: 7）

19) この語彙が概念形において母音で終わっているために所属形か否かが判断できない。北海道方言においても母音で終わっている語の所属形（短形）は概念形と同じである（例：sapa「頭（概念形）」、ku-sapa「私の頭（所属形短形）」、ku-sapa-ha「私の頭（所属形長形）」）であり、樺太方言にもこれが当てはまると思われる。

20) 実際には人称接辞が付加されていても、所属接尾辞が付加されていない例もある（知里 1973 [1942]: 533）。その場合でも人称接辞が付加されていれば人称形（所属形部分は概念形と一致することになるが）として扱うことにする。

21) 配分単数 (distributive singular) は、英語を例にすれば、We have a nose. という時の a nose のように、we を構成する個人を想定して、配分的に単数形にする現象である（荒木 [編] 1999: 170）。

後述する資料においても、以下のような例がみられ、「配分単数」の用法が確認できる。

- (6) アノカイ、ウタラ、ネー、イヌカラツシ、イケ、(中略)、アン、テキ、ナー、ウカツシ、
 anokay'utara nee i-nukara-hsi ike... an-tek-i naa uk-ahsi
 PRON でも(?) 1PL.O-見る-PL CONJ 1PL.P-手-POSS も とる-PL
 「私達でも見つけると、(中略) 私達の手をも握って」

(山邊 [著]・金田一 [編] 1913: 175)

この文の an-tek-i は服部 (1961: 7) の an-seta-ha や例文(5)と同じく「配分単数」と捉えられる。なお、例(6)の anokayahcin というように、1 人称人称代名詞 anokay に複数接尾辞-ahcin が後接した例が見られるが、人称代名詞の種類・用法はかなりの地域差・文体差があるため²²⁾、本稿では扱わない。また、人称代名詞自体も他の名詞とかなり性質を異にする点²³⁾も本稿での分析の対象外とする理由である。

2.4. 先行研究の記述および問題点

先行研究において、-ahcin と-utara の差異に関する指摘は一定しない。Piłsudski (1912) と村崎 (1979) に両者を対照した記述はあるが、それが妥当であるかは検討の余地がある。Piłsudski (1912) は-ahcin が無生物に、-utara が生物に用いられるのが基本だとしているのに対し、村崎 (1979) は所属形に付加されるか概念形に付加されるかという違いを指摘している。村崎 (1979: 92) は-uta (h)、-utara の前節要素は「所属形ではない」と指摘しているが、知里 (1942 [1973: 518]) の例²⁴⁾や例文(9)にあるように、-utara は人称形 (所属形) にも後続する。Piłsudski (1912) の指摘は、親族名称を除く人名詞など、所属形を取りにくい名詞に-ahcin が付加されていないことを反映していると考えられる。

以下、現在利用できる樺太方言、特に東海岸方言を記したテキストから複数接尾辞-ahcin が付加された語をすべて取り出し、形態と意味の面から分類する。

3. 樺太方言資料

本稿の分析対象は、Piłsudski (1912)、Piłsudskij (2002)、山邊 [著]・金田一 [編] (1913) といった東海岸地域に居住していた話者のテキストである。その他、基礎語彙調査の記録である服部 [編] (1964) を利用する。服部 [編] (1964) は樺太西海岸北部ライチシカの基礎語彙調査記録であるが、他に見られない重要な情報が含まれているため分析対象とした。山邊 [著]・金田一 [編] (1913) は自叙伝であるが、Piłsudski (1912)、Piłsudskij (2002) は民話テキストである。山邊 [著]・金田

22) 山邊 [著]・金田一 [編] (1913) においては anokay'a(h)sin は 102 例出現するのに対し、anokay'utara は 14 例のみである。しかし、Piłsudski (1912) では anoka(y) が 64 例見られるのに対し、anokay yahcin が 1 例 (語り手は山邊安之助) 見られるのみである。また、樺太西海岸北部のライチシカでは anokayahcin (一人称複数) は 20~30 代以上の言葉で、60 代以上の男性は 1 人称単数として用いるという (服部 1961: 6)。この点は地域差、文体差を考慮したうえで更に検討されるべき事項である。

23) 名詞の数表示が義務的でない日本語においても、代名詞に関しては「単数/複数」という対立が見られるが (仁田 1997: 113)、人称代名詞は数表示に関して他の名詞と異なる性質を有している、という言語普遍的傾向が認められる (山越 2003: 146)。

24) 知里 (1973 [1942]: 518) で an-cinkew-he utara 「1SG.P-先祖-POSS-PL」という例が挙げられている。

一 [編] (1913) はカタカナで筆記されているが、Piłsudski (1912) は独自のアルファベット、Piłsudskij (2002) はキリル文字で表記されている。山邊 [著]・金田一 [編] (1913) の語り手の山邊安之助は Piłsudski (1912) に収録されている物語の語り手でもある。2.3.1 で述べたように、複数接尾辞の形態に関しては揺れがある (山邊 [著]・金田一 [編] (1913) では-sin という形態のみしか出現しない)。

3.1. 複数接尾辞-ahcin の用例

用例の調査から、先行研究で指摘されているように、-ahcin の前節要素の多くは普通名詞の人称形 (所属形) であることが確認できる。しかし、これまで指摘されていない位置名詞や名詞化辞²⁵⁾ (補文標識) が-ahcin の前節要素となっている例も見られる。また、動詞に付加された例が服部 [編] (1964) に見られる (詳しくは後述する)。以下に-ahcin が付加された名詞句を分類し列挙する。Piłsudski (1912 : 36) が-utara は生物に付加されるのに対し、-ahcin は普通、無生物に用いられると指摘している (この二つは、無生物または生物に付された価値によって置き換え可能だということから、普通名詞に関しては、生物と無生物に分類した。カタカナで筆記されたものはアルファベットに表記を変更した。原典がアルファベットのものは、原典の補助記号は省き、便宜的にスペースやハイフンを加えた。

表 1. Piłsudski (1912)、Piłsudskij (2002) における-ahcin の用例 (表記は変更した)

前節要素	用例 (物語番号(Nr= Piłsudski 1912, T= Piłsudskij 2002) 行数)
普通名詞所属形 (有生物)	mahpo-ho-cin 「娘」 (Nr. 3: 10) An-(h)ok-ho-cin 「私の夫」 (Nr. 12: 34, 37) ay(<an)-sah(a)-sin 「私の姉」 (T 9: 58~59) an-po-ho-cin 「私の子供」 (Nr. 12: 199) an-mahpo-ho-sin 「私の娘」 (T10: 26~27) sirimak-i-sin 「(二人の兄)憑神」 (Nr. 23: 86) utar-hi-cin 「アイヌ」 (Nr. 4: 7) i-hoskiram-hu-sin 「兄」 (Nr. 27: 41,44) usiw-he-cin 「召使」 (Nr. 5: 20) mac-ih-i-sin 「妻」 (Nr. 27: 41) aynu-he-cin 「人間」 (Nr. 9: 2) An-hoskiram-hu-sin 「兄」 (Nr. 27: 47)
普通名詞所属形 (無生物)	su-he-cin 「鍋」 (Nr. 2: 188) nirus-i-cin 「歯茎」 (Nr. 24: 66) kotan-hu-cin 「村」 (Nr. 4: 49) kiro-ho-cin 「靴」 (Nr. 12: 36) tek-ih-i-cin 「手」 (Nr. 4: 65) mompec-i-sin 「指」 (Nr. 20: 31) imak-i-hcin 「歯」 (Nr. 6: 48) ikoro-sin 「宝物」 (Nr. 23: 34) sonap-hi-cin 「膳」 (Nr. 24: 61)
位置名詞長形	sopake-he-sin 「上座」 (Nr. 23: 175) tukareke-he-cin 「先」 (Nr. 15: 49)
名詞化辞	ru-he-sin 「跡、道」 (Nr. 1: 316; Nr. 26: 40) siri-cin 「様子」 (Nr. 24: 79) hum-i-cin 「音」 (Nr. 6: 24, 31-32) hum-hi-sin 「音」 (Nr. 1: 173; Nr. 21: 53; Nr. 23: 41) haw-he-cin 「声」 (Nr. 21: 57, 58; Nr. 23: 140, 160) woroke-sin (haworo-ke-sin(?)) 「声」 (Nr. 21: 87)

25) ここでいう名詞化辞は、佐藤 (2008) が指摘するように、名詞化にあたって関係節化という過程を必要とする形式名詞と異なるものである。

表2. 山邊〔著〕・金田一〔編〕(1913)における-ahcinの用例(原文はカタカナ表記)

前節要素	用例(ページ)	
普通名詞所屬形(有生物)	aynu-he-sin「人々」(79; 175)	utari-hi-sin「仲間」(7; 123; 138)
普通名詞所屬形(無生物)	netopake-he-sin「からだ」(175)	sonko-ho-sin「伝言」(125)
	sapa-ha-sin「頭」(175)	(yaykota-)korope-he-sin「(自分の)持ち物」(148)
	ekut-ih-i-sin「首」(175)	hahka-ha-sin「帽子」(27)
	sik-ih-i-sin「目」(163)	tehpoo-sin「鉄砲」(127)
	ram-u-sin「ところ」(55)	cip-ih-i-sin「舟」(187)
	haw-che-sin「声」(140)	cekoykikotan-hi-sin「漁場」(139)
位置名詞長形	なし	
名詞化辞	kot-ih-i-sin「跡」(113)	haw'oro-ke-sin「声」(140)
	hum-i-sin「音」(116)	ruu-he-sin「道」(109, 113)
	haw-e-sin「噂」(157に2例)	ruu-he-sin「こと」(129)

服部〔編〕(1964)における-ahcinの用例(全て動詞 uriwahne に後続)

uriwahne-hcin「兄弟(兄弟姉妹)」(42)

ohkayo uriwahne-hcin「男兄弟」(42)

mahtekuh(～mahne) uriwahne-hcin「女兄弟」(42)

3.2. 複数接尾辞-ahcinの前節要素と「複数」の意味

3.2.1. 普通名詞の所屬形+複数接尾辞-ahcin

山邊〔著〕・金田一〔編〕(1913)に出現する-ahcinの用例と、Pilsudski (1912)、Pilsudskij (2002)の用例とで有生物・無生物の用例数に大きな差異があるが、これはジャンルの差異によるものと思われる。山邊〔著〕・金田一〔編〕(1913)は自伝であり、かつ一人称で述べていく方式であるのに対し、Pilsudski (1912)、Pilsudskij (2002)は民話資料で、登場人物である兄弟、姉妹、娘に関心が向けられているからだと思われる。そのため、有生物の中でも圧倒的に人名詞が占める割合が高くなっている。ただし、人名詞の例のほとんどは親族名称であり、所屬形を取るか否かが、-ahcinの分布に大きく関わっていると思われる。

また無生物であっても、身体部分、親族、身に着けるもの等、人間の所有物に-ahcinが付加される傾向が見られるが(犬の声(山邊〔著〕・金田一〔編〕1913: 140)などはこの例に当てはまらない)、-ahsinが基本的に無生物に用いられるとまでは言うことができない(山邊〔著〕・金田一〔編〕1913の用例と比べてもPilsudski 1912、Pilsudskij 2002の有生物+-ahcinは多い)。

-ahcinの前節要素は兄弟姉妹、民族、指のような複数ある身体部位など、ある種の等質の集合を示す名詞である。これは英語などで複数形で表されるようなものであり、同質複数と言えるものである。この解釈は、同質複数であることが困難な個人名²⁶⁾、つまり同質複数を意味できない名詞に、-ahcinが付加されない点からも支持される。ただし、1例のみであるが、同質複数に当てはまるか疑わしいものがある。-ahcinが同質複数を表すとすれば、Nr. 12: 34, 37 (Pilsudski 1912: 118)のan-(h)ok-ho-cin (1SG.P-夫-POSS-PL)は「夫(複数)」ということになる。実際、Pilsudskiの英訳でもhusbandsとなっているが、知里(1944 [1973]: 366)では「特に複数なることを明示したい時」にはan-(h)oko utara、an-(h)oko-cinという二つの言い方があるとし、どちらも「夫及びその連れ」と解釈している。Nr. 12: 34 (Pilsudski 1912: 118)のan-(h)ok-ho-cinは話の筋から、「夫とその弟」を指していることが分かるが、「兄弟姉妹」を同質複数に含むのであれば、夫とその弟も

26) 樺太方言では全ての普通名詞が人称形をとるという指摘がある(村崎 1979: 83)。

同質複数に含められる可能性がある。

位置名詞²⁷⁾に-ahcin が付加された例が見られ(位置名詞は人称変化において普通名詞と異なる(田村 1997 [1988]: 18))、用例としては sopake-he-sin 「上座」(Nr. 23: 175) と tukareke-he-cin 「(巫者の目)の先」(Nr. 15: 49) の 2 例があるが、sopake-he-sin は上座に安置されている宝物を指しており、あくまでモノを指しているようである。位置名詞へ付加された例は少なく、現段階では十分に検討することは困難であるため、周知的な事例と考えておく。

3.2.2. 名詞化辞+-ahcin

ここでは文を名詞化するものを名詞化辞(補文標識)と呼ぶ²⁸⁾。対象テキストからは siri(hi)、humi(hi)、hawe(he)、ruuhe (haw、hum、ruu と同じように用いられる haworoke(he)、humoroke(he)²⁹⁾、ruuroroke(he)³⁰⁾ という名詞化辞もみられる)による名詞化節が見られるが、それぞれ視覚、視覚以外の感覚、何らかの証拠、発声に基づく認識であることを示すものである³¹⁾。ただし、完結文を名詞化したものであっても、内容節を作るというよりはより具体的な意味を持つものもある。以下の例(7)は、ruuhe が「道」という具体的な意味を持っている。

- (7) ivam pój sékuxpe kimójki rú-he okákara makap-an.
 六人の 小さい 青年 獵に行く 道-POSS に沿って 奥へ行く .PL-1SG.S
 「六人の若者が獵に行く路に沿って私は登っていった」

(Nr. 26: 17-18)

樺太方言では、北海道方言で広く見られる補文標識としての名詞化辞 hi は見られない。樺太方言では、名詞化接尾辞 hV (V は母音)³²⁾が補文標識として文末に用いられた例があるが、それに複数接尾辞-ahcin が付加された例は確認できていない。siri(hi)、humi(hi)、hawhe~hawe(he)(haworoke(he))、ruu(he)といった証拠性を意味する名詞化節に複数接尾辞-ahcin が付加されていると見ることができる。以下に名詞化辞による従属節と、主節に相当する存在動詞 an³³⁾が組み合わせられた例と、名詞化節が動詞の項となっている例をあげる(以下では [] で囲んだ部分が従属節となっている名詞化節である)を見る。存在動詞 an と組み合わせられた名詞化構文は、従属節で示される事象が存在することを表している。そのため、補文標識である名詞化辞に複数接尾辞-ahcin が付加されていることは、名詞化節が表す事象が複数存在していることを示している可能性が

27) 位置名詞は普通名詞と人称変化が異なる。また、普通名詞の所属形に類似するものとして、長形があるが、これは基本形に接尾辞をつけて形成されるものであり、一部普通名詞の所属形の形成法と重なる。用例ではすべて長形だが、長形は基本形と違い、直前に相対的位置の基準となる先行詞がなくても構わない。この点は普通名詞の所属形と異なっている。

28) 表 1、2 では完結文に後続するものを名詞化辞として扱ったため、意味からは名詞化辞よりも普通名詞の所属形として扱ったほうが良いものも含まれている。ただし、普通名詞所属形 ruu-he 「道、跡」のように名詞化辞 ruuhe 「こと」とははっきり区別出来るものは多くない。

29) 村崎 (1976: 44、98、99、109) に用例が見られるが、管見の限り-ahcin が付加されたものはない。

30) 村崎 (1976: 19、35) に用例が見られるが、管見の限り-ahcin が付加されたものはない。

31) この部分は高橋 (2013: 129) をもとにまとめた。高橋 (2013) が報告する十勝方言では、平叙文で名詞化辞+存在動詞 an を用いるのが一般的である点で樺太方言と似ている。

32) 子音の後では-hi という形態になる (知里 1942 [1973: 498])。

33) 存在動詞 an 「ある」の複数形 okay が用いられた例は確認できていない。

高い³⁴⁾。なお、名詞化辞に存在動詞が組み合わされた構文について、機能語化した形式とする分析が示されている³⁵⁾。

hum(i)hi

北海道十勝方言で hum による名詞化節は、視覚以外の感覚による認識を表す（高橋 2013：133）が、これは樺太方言 hum(i)hi にも当てはまる。

- (8) [níšpa -utara u-tóxše-ka humhi-šin] am³⁶⁾ manu.
 長者 -PL REC-寝る-CAUS NMP-PL ある VP
 「長者たちがみんな寝ている様子だったとさ」

(Nr. 21：52-53)

内容節内で、同じく utohseka「みんなで眠る（互いに眠らせる）」を用いていても名詞化辞に -ahcin が現れないこともある。その場合、例(9)のように動詞に複数接尾辞が付加されている。Piłsudski (1912) から、名詞化節内部の動詞に複数接尾辞が付加されている場合、名詞化辞に -ahcin は付加されないことが確認できるため、内容節内の事象全体に対して複数を表示するか、個々の動作に対して表示するかという点が異なっているのだと考えられる。

- (9) [án-ko-jup-útar-hi u-tóxše-ka-xší
 1SG.S-持つ-兄-PL-POSS REC-寝る-CAUS-PL
 v-etor -ekojki-xčí hūmhi] an-nu manu.
 REC-いびき-以て .APPL-叩く-PL NMP 1SG.S-聞く VP
 「兄たちがみんな寝て、いびきをかきあっているのが聞こえた」

(Nr. 23：32-33)

hawhe~hawhe(he)

北海道十勝方言で haw による名詞化節は、発声に基づく認識であることを表す（高橋 2013：133）が、樺太方言の名詞化辞 haw(e)he にも当てはまる。

- (10) [níšpa -utara pinapónne u-mojmoje hāuhe-šin] an manu.
 長者 -PL ひそかに REC-揺り起こす NMP-PL ある VP
 「長者たちがひそかに揺り起こしあう声がしたとさ」

(Nr. 21：57)

34) アイヌ語の動詞複数形の解釈には、動作、出来事の複数という捉え方が用いられている（田村 1997 [1988]：13）が、動詞における「複数」の表示に関しても、北海道方言と樺太方言で大きな差異があり、北海道方言の状況をそのまま当てはめることはできない。動詞の複数に関して不明な点が多く、今後の課題である。

35) 村崎 (1979：98) では sirihi an, ruwehe(ruuhe) an に関して助動詞連語としても扱えるとしている。中川 (1995：13) では、名詞化辞にコピュラや存在動詞が組み合わされた形式が「文末詞」として扱われている。ただし、北海道南西部の方言においては名詞化辞による従属節にコピュラ ne が組み合わされた形式が平叙文に用いられるのに対し、存在動詞が組み合わされる構文は、疑問文や感嘆文において用いられるものとなっている（田村 1997 [1988]：73、佐藤 2008：136）。

36) 存在動詞 an が m の前で m に中和した形。

- (11) [e-u-ćára-re, ko-sax hâuhe-ćín] an-nu manu.
 を .APPL-REC-言う-CAUS と .APPL-下る NMP-PL 1SG.S-聞く VP
 「(兄たちが) 言い合いながら帰ってくるのを私は聞いた」

(Nr. 23 : 160)

hawe が用いられた例も見られるが、hawhe との差は見られない。

- (12) セタ、アタイ、ユフケノ、アイヌ、ウタラ、イエー、ハウエ、シン、アン、
 [seta atay yuhkeno aynu -utara yee hawe-sin] an
 犬 値 高く アイヌ -PL 言う NMP-PL ある
 「犬の値段を、高くアイヌたちが言うといううわさがある」

(山邊 [著]・金田一 [編] 1913 : 157)

haw'oroke (he)

金田一 (1913 : 39) に「hau-oroke, (動) 騒グ, ワイワイ云ウ .」とあるが、実際には動詞として用いられた例は見つからない。山邊 [著]・金田一 [編] (1913) でも以下のように名詞化辞として用いられ、-ahcin が付加されている。これも hawe 同様、発声に基づく認識を表す。

- (13) セタ、ウタラ、ナー、オハ、チセ、カリ、メ、ハウ、オロケ、シン、アン、
 [seta -utara naa oha cise kari me[h] haw'oroke-sin] an
 犬 -PL も 空の 家 から 鳴く NMP-PL ある
 「犬たちも、無人の家から、鳴いている声がする」

(山邊 [著]・金田一 [編] 1913 : 140)

- (14) [aj-jup-útar-hi sapa voròke-śín (sap haworoke-sin)] am³⁷ manu.
 1SG.P-兄-PL-POSS 下る .PL NMP-PL ある VP
 「兄たちが帰って来る声がしたとき」

(Nr. 21 : 87)

ruuhe

ruuhe は話し手が確信している事柄に用いられる (北原 [編] 2014 : 75)。ruwehe (～ruuhe) は「そうだと判断する当然の証拠がある場合で〈～のだな〉と訳していい場合が多い」(村崎 1979 : 98) という。

- (15) [i-réske ćká, tani śirúkunni kusu,
 1SG.O-育てる 鳥 いま 暗くなる CONJ
 u-tóxsé-ka rúhe-śín] án.
 REC-寝る-CAUS NMP-PL ある
 「私を育ててくれた鳥 (二羽) がもう暗くなったので、寝ていた」

(Nr. 1 : 314-316)

37) an が m の前で m に中和したもの。

siri(hi)

本稿の主な資料ではなく、北原ほか〔編〕(2003:84)で確認できたものである³⁸⁾。siriは視覚によって認識される事柄に用いられる(北原〔編〕2014:75)。村崎(1979:98-99)によれば、sirihi anは「周囲の状況から判断して、どうも～らしいと想像すること」で、「噂を聞いてそう思う」ことも意味するという。以下の例(16)は視覚によって認識している。

- (16) [nea nea oyas-utah tani ruwesana okaakara makah siri-hcin an] manu.
 その その 化け物-PL 今 浜への道 通って 上る NMP-PL ある VP
 「その、例の、化け物たちはちょうど、浜に行く道を通して、上って来る様子であったという」
 (北原ほか〔編〕2003:84)

Piłsudski (1912)、山邊〔著〕・金田一〔編〕(1913)における名詞化辞+*-ahcin*の用例から、名詞化節内の動作主は全て複数であり³⁹⁾、名詞化節内の事象が複数発生していることが確認できる。また、内容節内に相互接頭辞 *u*-「互いに」が付加された動詞、もしくは相互接頭辞 *u*-と使役接尾辞 *-re/-ka* で囲まれた *u*-...*-re/ka*「互いに～させる(＝みんなで～する)」⁴⁰⁾というタイプの動詞が多く見られ、名詞化節内で同質の事象が複数存在していることを示していると考えられる。

3.2.3. uriwah 「互いの兄弟姉妹である」+複数接尾辞-ahcin

また民話や自伝テキストでは確認できていないが、服部〔編〕(1964)では、「兄弟」「姉妹」のように対照的な関係を表す場合、一部に-ahcin が付加されることが確認できる。-ahcin が付加されたものは、同じ親から生まれたものとして同質の存在であると考えられる。ただし、-ahcin の前節要素は名詞ではなく、uriwahne 「互いの兄弟姉妹である」という意味の動詞である点が他と異なっている。

「兄弟」「姉妹」に対して、「親子」に-ahcin が付加されることはない。これは、「親子」であることは、どちらか片方が親で、もう一方が子どもであるという関係であり、「同質」という関係ではないからだと考えられる(兄弟、兄妹、姉妹、姉弟などの関係はどれも iriwah で区別せずに言う)。

u-poo-koro-utah 「親子」 *u-cinkew-koro-utah* 「親子」
 REC-子-持つ-PL REC-先祖-持つ-PL

(どちらも服部〔編〕1964:41)

-ahcin が付加されている uriwahne は、語源的には *u-iriwah-ne* (REC-兄弟姉妹-COP) という動詞だと考えられるが(実際、服部〔編〕1964:42では「男兄弟である」「女兄弟である」という動

38) Piłsudski (1912:218) (Nr. 24:79) に siri-cin が出現するが、名詞化辞が副詞節マーカーとして用いられているようであり、他の例とかなり用いられ方が異なっているため、ここでは例文として挙げなかった。

39) -ahcin が付加されていない名詞化節内の動作主は基本的に単数である。山邊〔著〕・金田一〔編〕(1913)において複数接尾辞-ahcin が付加されていない名詞化辞 ruuhe は13例出現するが、単数にあてはまらない場合でも、舟に乗った一行(3例)、日本人(集団)(1例)というようにひとまとまりの集団と考えられる。

40) Piłsudski (1912:37, 41) は *u*-...*-te* (*-re* は母音に、*-te* は子音に後続する) */-ka* を三人称複数形としている。また知里(1973[1942]:510)も「*u*+完用詞(註一自動詞)+使役接尾辞」の形式を樺太では単なる複数と考えてよいとしている。

詞としても用いられている)、-ahcin が付加されていることからしてここでは名詞相当として扱われているようである⁴¹⁾ (アイヌ語において自動詞は名詞としても用いられる⁴²⁾)。ただ、名詞の所属形+-ahcin という構成の*uriwak-ihci-hcin という形ではないなど、これまで見てきた複数接尾辞の名詞への接続規則とは一致していない。名詞の所属形は所属先が想定されるが、相互接頭辞 u- が付加された動詞 (名詞相当) の所属先は関係を持つ者同士であり、所有者を想定する所属形にする必要はないことが考えられる。この点に関しては今後、さらに分析を進める必要がある。

4. 複数接尾辞-utara との意味の対照

4.1. -utara の統語的特徴

以下では複数接尾辞-utara との若干の対照を試みる。複数接尾辞-utara は以下の例文(17)、(18)のように動詞句や名詞句に接続し複数であることを明示する。また、自立形式の普通名詞 utara 「親戚、身内」のほか、独立して用いられる utara (詳細は佐藤 1976 参照) もみられる。以下では普通名詞 (概念形・人称形⁴³⁾ の双方を含む)、固有名詞に接続し、複数であることを明示する-utara のみを対象とする。以下の例文(17)、(18)のように、-utara は名詞の概念形にも、人称形にも付加されるほか、後述するように固有名詞にも付加される。名詞化辞に-utara が付加された例はない。

動詞的要素を前に伴う-utara

- (17) イシカリ、コタン、オツタ、オカイ、ウタラ、
 Iskari kotan ohta okay -utara
 石狩 村 に いる.PL -PL
 「石狩の村にいる人々」

(山邊 [著]・金田一 [編] 1913 : 28)

名詞的要素を前に伴う-utara

- (18) タン、コタン、オツタ、ヘツク、チセ、ウタラ、ネアンペ、
 tan kotan ohta hetuku cise -utara neanpe
 この 村 に 建つ 家 -PL TOP
 フシコ、アイヌ、チセ、ハンネ、 テ、
 husko aynu cise han ne te
 古い アイヌ 家 NEG COP CONJ
 「この村へ建てた家は、古いアイヌの家ではなくて」

(山邊 [著]・金田一 [編] 1913 : 34)

41) 例えば、北海道沙流方言で似た構成の語に uirwakikor (u-「互い」 irwak 「兄弟」 -kor 「持つ」) があるが、これは「兄弟姉妹の関係にある」という意味と共に、名詞として「兄弟姉妹」と言う意味を表すことが知られている (田村 1996 : 751)。

42) 樺太方言においては北海道方言に比べて名詞として用いられる自動詞の範囲が広いように思われる。北海道方言で確認できず、樺太方言で確認できるものに自動詞 okay 「いる (複数形)」が「暮らし」という意味で用いられた例がある (Nr. 27, 49)。そのほか、paye 「行く (複数形) → 行くこと」(山邊 [著]・金田一 [編] 1913 : 9)、asin 「出る → 出ること」(同 : 96)、inkara 「見る → 見ること」(Nr. 12, 168) などのように、動詞の項となって名詞化しているものが多くみられる。

43) 知里 (1973 [1942] : 518) に挙げられている an-cinkew-he utara 「1SG.P-先祖-POSS-PL」という例以外に所属接尾辞が付加されたとはっきり分かる例は確認できていないが、例(19)、(22)のように人称形と判断できるものはいくつか見つかる。

- (19) アイ、シランコレ、ウタラ、イ、レシケ、ケライ、クス、
 ay⁴⁴⁾-sirankore -utara i-reske keraykusu
 1SG.P-親戚(-POSS?)-PL 1SG.O-育てる お蔭で
 「親戚たちが私を育ててくれたお蔭で」

(山邊 [著]・金田一 [編] 1913: 2)

4.2. 複数接尾辞-utara の意味的特徴

まず、-utara に前節する名詞としては、人称代名詞（これは分析から除外する。「2.3.2. 統語的・意味的な特徴」参照）、普通名詞の概念形、普通名詞の人称形、固有名詞が挙げられる。普通名詞の概念形、固有名詞に付加される点は-ahcin と異なっている。特に-ahcin が固有名詞に付加された例が確認できないのは、固有名詞の指示する対象が唯一のものであり、同質複数の場合がありえないからだと考えられる。それに対して-utara は固有名詞に付加された例がいくつかみられる。これは-utara が近似複数を表すことを示唆する。次項で考察する。

4.2.1. 複数接尾辞-utara と近似複数

-utara が近似複数も表すという解釈は、以下のように固有名詞（人名）に付加された例からもうかがえる。以下の例(20)において、Eekichi-utara が「複数の同質の『英吉』」を示しているのではなく、「英吉とその他の人々」を意味していることは明らかである。

- (20) エーキチ、ウタラ、ホピツサンネ、マカパツシ、
 Eekichi -utara hopihsanne makap-ahsi
 英吉(人名)-PL 浜から 上がる-PL
 「英吉たちが浜からやってきた」

(山邊 [著]・金田一 [編] 1913: 75)

また、固有名詞でなくても近似複数を表すことがある。Pilsudski (1912: 222) には、おじとその妻二人を指して an-kor aca utarikhe（これは an-koro aca に-utara が付加されたものの所属形だと考えられる）と呼んでいる例がある。

- (21) Rúrupa kotan [án-kor aca -utárik⁴⁵⁾]-he jajkoréske.
 ルルパ 村 1SG.S-おじ-PL-POSS 自らを育てる
 Án-kor aca tu máx, íski, koro manu.
 1SG.S-持つ おじ 二人の 妻 FIL 持つ VP
 「ルルパ村の私のおじたちのところで(私は)自ら成長していた。私のおじには二人の妻がいた」
 (Nr. 25: 1-2)

(20) (21)のように、-utara は近似複数を表わすことができるが、(22)のように同質複数も表わすことができる。(22)は二人の兄を追いかける場面である。

44) an-がsの前で音韻変化したもの。

45) -utarike は-utara の所属形-utari に相当する。utarike の-ke は本来「～の所」という意味を持つ接尾辞。

- (22) An-kijánek -utara pajé-ši toko an-óponi,
 1SG.P-兄 -PL 行く.PL-PL 所 1SG.S-追う
 「兄たちが行った所に私は向かった」

(Nr. 27 : 17)

4.2.2. 近似複数と同質複数

村崎 (2013 : 70-71) では所属複数接尾辞として-ahcin が挙げられ、-utara との違いを以下のように指摘している。

自分の孫のような小さい子どもが複数いるのを指して(1) ku=micihi=hcin 《私の孫たち》と(2) mitutara < mih + 'utara 《孫たち》の二通りの言い方ができる。つまり、(1)は「自分の孫たちの集団」(2)は「孫のような小さい子どもたちの集団」を意味している。これは非常に面白い手続きで、複数の集団が誰か、あるいは何かに所属しているか否かで文法的手続きが全く異なるわけで、この言語ではある集団の帰属性が文法的な意味を持つとすることができる。もう一つ例を挙げる。長老を含む集団を見て、(1) taranoka nispa 'uta 《あの長老たち》(2) tan nispa 'utari-hihcin 《あの長老のお伴たち》この接尾辞は所属形にしか接続しないから所属複数接尾辞 possessive plural と呼ぶことにする

(村崎 2013 : 70-71)

前述のとおり、-utara は人称形 (所属形) にも後続する。そのため、所有物の「複数」であれば、必ず-ahcin が用いられるというわけではない。本稿での-ahcin、-utara の分析と、以上の村崎 (2013) の例と日本語訳から、以下のような解釈を考えることができる (アイヌ語横の《 》の中は村崎氏による日本語訳)。

- ① ku-mic (< mit) -ihi-hcin 《私の孫たち》
 1SG.P-孫-POSS-PL
 「私の孫たち」(同質複数、全員が「私の孫」)
- ② mit-utara 《孫たち》
 孫-PL
 「孫たち」(同質複数 or 近似複数、全員が「私の孫」、もしくは孫 + a)
- ③ tan nispa utari-hi-hcin 《あの長老のお伴たち》
 この 長老 仲間-POSS-PL
 「この長老の仲間たち」(同質複数、全員が「長老の仲間」)
- ④ taranoka nispa-uta 《あの長老たち》
 あれら 長老-PL
 「あの長老たち」(同質複数 or 近似複数、全員が「長老」、もしくは長老 + a)

村崎氏による日本語訳からは、-ahcin と-utara の違いは、単に「集団の帰属性」を問題にするか否かではなく、同質複数を表すか、近似複数をも表すかという点と関わっていると言えるだろう⁴⁶⁾。なお、例③④において、③では連体詞 tan「この」が用いられているのに対して、④では複数の連体詞 taranoka「あれら」⁴⁷⁾が用いられていることにも-ahcin と-uta(ra)の違いが関わっているとみることが出来る。tan が nispa を修飾し、複数形の taranoka は複数の指示対象 nispa uta を修飾している。つまり、utari-hi-hcin は一人の tan nispa に所属し（この utari は「仲間、身内」という意味の普通名詞）、-ahcin はその utarihi が多数存在することを示すのに対し、nispa utara は nispa が複数、もしくは nispa + a であることを示す。

4.2.3. 例示的近似複数

以上で述べたこと以外に、-ahcin と-utara の意味の違いとして「例示的近似用法」を持つという点が挙げられる。例示的近似用法は、山越（2003：141）で提案されたもので、先行する名詞以外の対象を含まない用法のことを指す。-utara もこの用法を持つ可能性がある。以下はその例である。南極探検の際、極地への突進隊となった山邊安之助氏ほか4人が、極地にたどり着き、帰ってきた場面のものである。その場面は「それから隊長始め皆々一同、天幕へ凱旋し、茲に始めて、村松やら吉野やらに逢って、私達までも、ほつと安心した。村松吉野等も安心をした」（山邊 [著]・金田一 [編] 1913：183）とあるが、その下線部は以下のようになっている。

- (24) ムラマツ、 ヨシノ、 ウタラ、 ナー、 エラムシン、 ネツシ、
 Muramatsu Yoshino -utara naa eramusinne-hsi.
 村松 吉野 -PL も 安心する-PL
 「村松・吉野たちも安心した」

（山邊 [著]・金田一 [編] 1913：183）

この前の場面で「そして、其の軒涯の上に天幕小屋を建て、其處に、村松氏及び吉野氏の二人がウエールズ灣測量隊となつて、根據地へ居遺ることになった」（山邊 [著]・金田一 [編] 1913：180）と述べられている通り、Muramatsu Yoshino -utara は村松、吉野の二人のみを表すと解釈するのが妥当だと思われる。だとすればこれは山越（2001：268）のいう「例示的近似用法」に当たるものである。

5. 結論と今後の課題

本稿では、アイヌ語樺太方言における名詞複数接尾辞を検討した。名詞の複数接尾辞としては-ahcin、-utara の二つを認め、-ahcin を中心に分析し、必要に応じて両者の対照を行った。まず-ahcin は先行研究の指摘通り、名詞の所属形に付加されることが確認できる。しかし、普通名詞の所属形だけでなく、名詞化辞に-ahcin が付加された事例も確認された。普通名詞の所属形+-ah-

46) 所属先を指定する所属形に-utara が付加される例もあるため、「集団の帰属性」を問題にするか否かは-ahcin と-utara の選択には関わらないと思われる。

47) アイヌ語の連体詞において、複数の指示対象に対して単数が用いられることはままあるが、単数の指示対象に対して複数が用いられることはない。

cin はほぼ例外なく同質複数を表す。-ahcin が付加された名詞化節は動作主が複数で、かつ複数の同質の事象が起こっていることが確認できる。-utara に関しては、-ahcin が同質複数のみを表すのに対し、同質複数だけでなく近似複数も表すことが確認できる。-utara が個人名に付加される事例があることもこれを裏付けている。

アイヌ語において、同質複数、近似複数という観点から名詞複数接尾辞について指摘したものはなく、有意義な結果が得られたと考えている。しかし、樺太方言を除くアイヌ語において、名詞複数接尾辞-ahcin に類似するものは知られていない。このような方言間の差異にある歴史的背景について詳細に検討し、発展させることが今後の課題である⁴⁸⁾。

略号一覧

1、2、3	1、2、3 人称	NEG	否定	PRON	人称代名詞
APPL	充当接頭辞	NMP	名詞化辞	Q	疑問
CAUS	使役	NOM	名詞化接尾辞	REC	相互
CONJ	接続助詞	O	目的格	S	主格
COP	コピュラ	P	所有格	SG	単数
FIL	いいよども	PL	複数	TOP	主題
IND	不定	POSS	所属接尾辞	VP	助動詞

参考文献

- Daniel, Michael & Moravcsik, Edith (2005) Chapter The Associative Plural. In: Haspelmath, Martin & Dryer, Matthew S. & Gil, David. & Comrie, B. (ed.) *The World Atlas of Language Structures*. 150-151. New York: Oxford University Press.
- Piłsudski, Bronisław. (1912) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*. Cracow..
- Pilsudskij, Bronislav. (2002) *Fol'klor Sakhalinskikh Ajnov. Ūžno-Sakhalinsk*.
- Jespersen, Otto. (1924) *The philosophy of grammar*. London: George Allen & Unwin. (日本語訳は イェスペルセン [著]・安藤貞雄 [訳] (2006))
- 荒木一雄 [編] (1999) 『英語学用語辞典』三省堂.
- イェスペルセン [著]・安藤貞雄 [訳] (2006) 『文法の原理 (中)』岩波書店.
- 金田一京助 (1913) 「あいぬ物語附録 樺太アイヌ語大要・樺太アイヌ語彙」山邊安之助 [著]・金田一京助 [編] 『あいぬ物語 附あいぬ語大要及語彙』(1)-(60), 博文館.
- 北原次郎太ほか [編] (2003) 『アイヌ語樺太・名寄・釧路方言の資料—田村すす子採録 藤山ハルさん・山田ハヨさん・北風磯吉さん・徹辺重次郎さんの口頭文芸・語彙・民族誌』「環太平洋の言語」成果報告書 A2-039, 大阪学院大学情報学部.
- 北原次郎太 [編] (2014) 『中級アイヌ語—カラフト—』アイヌ文化振興・研究推進機構.
- 佐藤知己 (1987) 「アイヌ語樺太方言の‘Uta’について」『ウエネウサラ』創刊号: 20-26.
- 佐藤知己 (2008) 『アイヌ語文法の基礎』大学書林.

48) 隣接するニヴフ語の複数標識に関しては丹菊 (2012)、蔡 (2014) がある。特に丹菊 (2012) はニヴフ語ボロナイスク方言の複数標識の用法をアイヌ語樺太方言からの影響である可能性を指摘しており、より詳細な対照が望まれる。

- 高橋靖以 (2013) 「アイヌ語十勝方言における証拠性と叙述類型」『北方言語研究』3: 129-136, 北海道大学大学院文学研究科.
- 田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』草風館.
- 田村すず子 (1997 [1988]) 「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 [編] 『言語学大辞典セクション 日本列島の言語』1-88, 三省堂.
- 丹菊逸治 (2012) 「ニヅフ語の複数表示—ポロナイスク方言の-gun の特殊用法」『北方人文研究』5: 113-122, 北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター.
- 蔡熙鏡 (2014) 「ニヅフ語東サハリン方言の複数標識-gun について」『北方人文研究』7: 71-81, 北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター.
- 知里真志保 (1973 [1942]) 「アイヌ語法研究—樺太方言を中心として—」『知里真志保著作集』3: 456-586, 平凡社.
- 知里真志保 (1973 [1944]) 「樺太アイヌの説話 (一)」『知里真志保著作集』1: 251-372, 平凡社.
- 知里真志保 (1975 [1954]) 『知里真志保著作集 別巻 I 分類アイヌ語辞典 人間編』平凡社.
- 鄭惠先 (2005) 「日本語と韓国語の複数形接尾辞の使用範囲—文学作品と意識調査の分析結果から」『日本語科学』17: 27-46, 国立国語研究所.
- 中川裕 (1995) 『アイヌ語千歳方言辞典』草風館.
- 仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して—』くろしお出版.
- バチラー, ジョン (1938) 『アイヌ・英・和辞典 第四版』岩波書店.
- 服部四郎 (1961) 「アイヌ語カラフト方言の『人称接辞』について」『言語研究』39: 1-20, 日本言語学会.
- 服部四郎 [編] (1964) 『アイヌ語方言辞典』岩波書店.
- 村崎恭子 (1976) 『カラフトアイヌ語』国書刊行会.
- 村崎恭子 (1979) 『カラフトアイヌ語—文法篇—』国書刊行会.
- 村崎恭子 [著]・丹菊逸治 [編] (2013) 『藤山ハル口述 樺太アイヌ語例文集(1)』北海道大学アイヌ・先住民族研究センター.
- 山越康裕 (2003) 「モンゴル語の複数接尾辞と名詞句階層」『言語研究』124: 131-153, 日本言語学会.
- 山邊安之助 (著)・金田一京助 (編) (1913) 『あいぬ物語 附あいぬ語大要及語彙』博文館.

Plural Suffixes *-ahcin* in Sakhalin dialect of Ainu

Ryo SAKAGUCHI

(Doctoral course Student at Graduate school of Humanities and Social Sciences,
Chiba University)

The Sakhalin dialect of Ainu has the plural suffix *-ahcin*, which is used in nouns and requires study in order to identify its specific meaning. In the Sakhalin dialect, a noun has two plural suffixes such as *-ahcin* and *-utara*. However, there is no detailed study regarding their difference. This paper analyzed the use of *-ahcin* by contrasting it with *-utara*. As a result of the investigation, it was concluded that *-ahcin* can be interpreted as an additive plural and *-utara* represents both additive and associative plurals. Moreover, only *-utara* is connected to proper nouns, and in that case, it is used in the meaning of associative plural.

